

ドクターを取ると いうこと

巻／頭／言

百年前、優秀な子供は「末は博士か大臣か」と賞されていた。たしかにあったはずなのだ、博士が大臣より先に称せられる時代が、それが数十年前には、「足の裏に付いた米粒」（取らないと気持ち悪いけど、取っても食べられない）といわれるようになり、今やなんと「高学歴のワーキングプア」である。

私はちょうど20年前にドクターを取ったが、その年にバークレーに共同実験に行き、当地ではドクターの学生に授業料がないだけでなく、ふつうに研究をするだけで生活費も出してもらっていることに驚いた。一方、向こうの学生からみると、私が「ドクターコースといえども学生だから授業料を払うのは当然」と受け取っていることにたいへん驚いたようで、ビールのジョッキを浮かせたまま「それなのになぜ、君はドクターコースへ進んだの？」と不思議そうに問われたことを昨日のように思い出す。私は下手な英語で必死に説明したが、残念ながら彼を納得させることはできなかった。「もう遅いよ」、そのときの感想である。

日本はどうやらずっと、ドクターの学生には冷たい国であったらしい。この国はユネスコの高等教育世界宣言を批准していない数少ない国の1つであることや高等教育にかかる予算の少なさなどは自分がラボをもってから知った最近のことである。このような時代風潮を反映してか、自分の学生にはドクター進学を勧めないという先生も増えているように思う。

このような厳しい現実の中、生物物理を志して博士課程に進学した若手の皆さんに巻頭言の場を借りてエールを送りたいと思います。

まずもって、ドクターコースへようこそ。学部や修士を出て企業で研究を行うひととドクター進学者との違いはその自立性であり、自らの脚で立って研究に取り組むことを決めた君の決意を先輩研究者として歓迎します。何より生物物理は面白いよね。自分の研究が百年先に役立つことを信じて、邁進してください。上の文章を読んで不安になったかもしれませんが、資源のないこの国の未来は科学技術が担っており、君たちが不幸になったら日本の将来はありません。君らに「覚悟」は必要ですが、必ず環境はよくなるはずです（自立した研究者として企業への道ももっと開かれるべきですね）。君の先生は君がドクターに進むことについて何といいましたか？ 私は5年でドクターを取らせるのは先生の責任だと思っていますが、君の先生はどうですか？ 活気ある生物物理のドクター取得者がいつまでも活気を失わないためにはどうすればよいか、これは君だけの問題ではありません。

神取秀樹, Hideki Kandori

名古屋工業大学大学院工学研究科